

■第12回精神障害者自立支援活動賞（リリー賞）受賞者 【当事者部門】

統合失調症等を乗り越え、作業療法士の経験を活かしピアサポーターとして働きながら、アートで社会とつながる路上詩人

笠原 健(詩人 artist けんぼー)さん 38歳【兵庫県神戸市】

作業療法士として精神科病院に勤務し、2年目に発症。服薬しながら3年間勤務を続けたが、その後8回もの入退院を繰り返す。初めての入院時に詩や絵の制作を始め、ウェブや個展で発表。2012年、道行く人に詩を贈る路上詩人としての活動も開始し、2015年には第16回スペイン・バルセロナ国際サロンに絵画を出品して日本芸術奨励賞を受賞した。一方、ピアサポーターとしても退院支援や講演を行うなど、自らの体験を表現活動やピアサポートなど様々な手段で発信している点が高く評価された。

●「詩人 artist けんぼー」の活動

初めての入院は29歳のとき。運動が好きだったのに動けなくなり途方に暮れていたある日、「詩のフレーズがサラサラと落ちてきた」と話す笠原さん。手元にあった鉛筆で絵も描き始め、今では年1、2回のペースで個展を開く。2012年からは神戸の繁華街に出て、道行く人と対話する路上詩人となった。「自分は社会に対して何かしたのか」と自問した結果だという。「誰も悩みや不安を抱えている。話すことで気持ちが楽になったという人と“ありがとう”の交換をした時、人の役に立てていると実感した。生きていいんだと思った」と笠原さん。「主治医の先生も“詩や絵を描くことが笠原くんの感情を安定させるのに大切だから”と応援してくれています」。



笠原さんの絵画作品は、障害者支援を行う企業のオフィスにも飾られている。上の作品のタイトルは『絆』

●ピアサポーターとしての顔

退院後、地域活動支援センターに通うことになった笠原さん。かつて精神科の作業療法士として「支える側」で働いていた経験を買われ、次第に他の精神障害者やその家族から相談を受けるようになる。「メンバーとして通っていたはずが、いつの間にかスタッフのようになってしまった」。状況を知った主治医の計らいで、ピアサポーターと兵庫県精神障害者相談員への道が開かれ、今では退院支援に参加したり、家族会や支援者向けの研修会で講演したりしている。「本人さん(当事者)と家族の間の溝を埋めるべく家族会では当事者の立場で話します」。



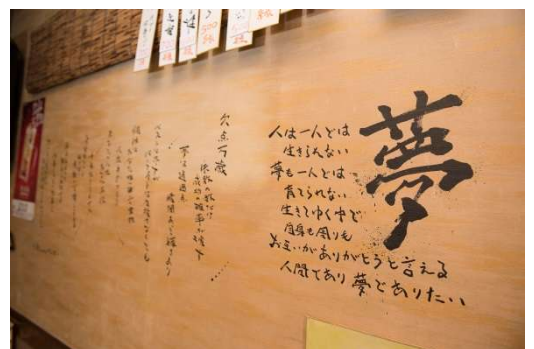
ピアサポーターとしては主に社会福祉法人ヨハネ会やNPO法人中央むつみ会の活動に参加

●創作活動もピアサポートも根っこは一緒

詩や絵の創作活動とピアサポートの「根っこは一緒」だという。「すべて“精神疾患の啓発”という同じ木。その木に咲く花は、アートだったりピアサポートだったり。病院の外を知らずに亡くなった友達や、社会に出て偏見を苦しんだ人もいる。僕にできることは何なのか。(答えは)これしかないのかなと」。

●今、伝えたいこと

最近では病気になることを悲観することもなくなった。「病気を通じていろんな人と出会うことができたから」。今、自分を肯定できないでいる人に「誰の心にも華があるよ」という言葉を届けたい。「否定的な言葉はマイナスのインパクトも大きい。声の掛け方、言葉の使い方が重要じゃないかと思います」。



馴染みの定食屋の壁に描かれた詩。常連客にも障害者をオープンにし、その場で詩を贈ることも